

『唐鍾馗全傳』について

——包公説話との関連を中心に——

桜井 幸江

一

内閣文庫蔵の『唐鍾馗全傳』は、清朝に流行した所謂『斬鬼傳』『平鬼傳⁽¹⁾』とは、同じ鍾馗を主人公としながら、実は、趣を全く異にする小説である。孫楷第氏は『中国通俗小説書目』卷七明清小説部乙の諷諭第四に『唐鍾馗全傳』を含めた右三書を列挙しているが、胡万川氏も言及している通り、『唐鍾馗全傳』をここに置いたのは、妥当とは思われぬ。孫目に従えば、『唐鍾馗全傳』は本来、靈怪類に属すべきものと思う。これに対して『斬鬼傳』『平鬼傳』の両書は、鍾馗による鬼退治を名目にしてゐるもの、実際は現実の人間の欠点・不善性等を鬼という形に仮託しており、確かに〈諷諭〉という面も強い。三書を一括して扱うべきかどうか、難しいところである。

本稿では、この三書のうち最も成立の早い『唐鍾馗全傳』の内容を検討し、包公説話との関わりを中心に述べていきたい。その前に、五月人形でおなじみの鍾馗とは一体何物で、どんな故事が語られていたのか、簡単に述べたいと思う。民間に信仰されてきた神々に関する記述を集めた元代の『三教源流搜神大全』では、玄宗の夢に現われた小鬼を食つて玄宗の病いを癒した鍾馗を、呉道子が絵に描いたという、かの有名な故事が採られている。そこでは、鍾馗が自身の



内閣文庫蔵『唐鍾馗全傳』書影 卷四

ことを、終南山の進士であり、武徳年間に応挙したが合格せず、それを恥じて殿階に頭をぶつけて自殺した、その時の厚葬に感じて妖怪退治をするのだ、と語っている。これが、最も素樸な形の記載といわれる北宋・沈括の『夢溪筆談 補筆談』では「上問大者曰、爾何人也、奏曰、臣鍾馗氏、即武舉不捷之士也、誓與陛下除天下之妖孽、夢覺、疔若頓瘳、而體益壯、——お上は大きな（鬼の）方にたずねた『汝は何者か』それに答えて申し上げるのに『臣は鍾馗と申し、武舉に合格しなかつた者です。誓って、陛下の為に天下の妖怪を除きます。』夢から覚めると、瘡は嘘のように癒え、身体は愈元気になった。」とのみ書かれている。

在したようで、『切韻』には「馗、神名」とある。⁽³⁾ 又、玄宗時代の大臣・張説の「謝賜鍾馗及歴日表」⁽⁴⁾によって、当時皇帝から大臣に、邪厲を払う神・鍾馗を画いたものが、新しい歴日表と共に下されていたことがわかる。『東京夢華録』⁽⁵⁾等の記載に拠ると、宋代には、一般の家でも鍾馗の画を門に掛け、年の暮れには鍾馗に扮して鑼鼓を敲き、追儺を行なっていたらしい。⁽⁶⁾

歴史上、実在しない鍾馗が、一体何処から生まれたのか、その由来については種々の説が有る。⁽⁷⁾ 中でも鍾馗は〈終葵〉の音通から、というのが有力な説の一つである。天子の服する大圭の首の部分を〈終葵〉⁽⁸⁾と称するが、その形は椎に似

ており、それで邪悪な者を撃つということらしい。又、〈終夔〉—邪悪な夔を治める、という説もある。そして、春秋時代已に有ったという大雛の儀式が唐代に至って次第に衰微し、儀式での主役だった方相氏に取って替わって鍾馗が辟邪の役割を積極的に果たすことになったらしい。その後、伝説の多い玄宗と結びついて、先に述べたような故事が生じたのであろう。

二

鍾馗にまつわる故事は、その信仰の隆盛と相俟って、明代以降、舞台の上でも演じられ小説にも編まれるようになった。それが『唐鍾馗全傳』であり、鍾馗を主人公とした最初の小説であるが、その内容にふれる前に、先ず体裁について述べたい。

現在、内閣文庫にのみ残っている『唐鍾馗全傳』四卷三十三則、不分回、は全部で八十葉（本文は七十九葉）。上図下文で、図の両側に四字句の解説が附されている。毎葉十行、一行十七字。三十三則の故事は、各則の初めに四字〜八字の題が記され、各則末は「未知如何、且聽下回分解」の句で締め括り、七絶が一首続く。

卷一の巻首は「鼎鏤全像按鑑唐鍾馗全傳卷之一」と題し、その左下に「書林 安正堂 補正」「後街 劉雙松 梓行」と、並記してある。「補正」とある以上、この書は原刊本ではないと思われる。刊行年の記載は無く、『中国通俗小説書目』でも単に、明刊と記すのみである。胡氏は、W.L. Idema 氏、Glen Dudbridge 氏の、万暦年間に建陽で出版されたという論を紹介し、胡氏自身も、内容から『唐鍾馗全傳』の成立は万暦年間か、或いはそれ以後であらう、としている。

以下に『唐鍾馗全傳』の巻首・巻尾の題目と、各則の標題を挙げ、続いて、少し繁雑になるが物語の梗概を記す。

尚、便宜上、各則には番号を附した。

〔鼎鏤全像按鑑唐書鍾馗全傳卷之一〕

- ① 鍾惠夫婦花園遊玩
- ② 鍾惠夫婦與兒取名
- ③ 鍾惠夫婦議兒就學
- ④ 鍾惠入館從師
- ⑤ 遊玩龍舟
- ⑥ 習學舉業
- ⑦ 帝試鍾馗
- ⑧ 求醫療病
- ⑨ 帝試鍾馗

〔鼎鏤全像按鑑唐書鍾馗斬妖傳卷之一終〕

〔鼎鏤全像按鑑唐書鍾馗降妖傳卷之二〕

- ⑩ 帝賜筆劍
 - ⑪ 送禮求婚
 - ⑫ 雷擊雉精
 - ⑬ 立斬石馬
 - ⑭ 收除鰲精
 - ⑮ 赴試不捷
- 〔鼎鏤唐鍾馗斬妖傳卷之二終〕

〔鼎鏤全像按鑑唐書鍾馗降妖傳卷之三〕

- ⑯ 超度秀英 (第三葉欠落)
- ⑰ 刀山地獄
- ⑱ 寒水地獄
- ⑲ 鋸解地獄
- ⑳ 磨匕地獄
- ㉑ 沸油地獄
- ㉒ 磔搗地獄
- ㉓ 割舌地獄
- ㉔ 稱秤地獄

〔鍾馗傳三卷終〕

〔鼎鏤按鑑唐書鍾馗降妖傳卷之四〕

- ㉕ 木馱地獄
- ㉖ 轉輪十殿
- ㉗ 回轉天宮
- ㉘ 誅戮山魃
- ㉙ 捉獲小鬼
- ㉚ 收捉蝙蝠
- ㉛ 證除元弼
- ㉜ 對證盆冤
- ㉝ 簡擊五通 (第十九葉以下欠落)

(注) 題目・標題については俗字を正字に改めた。以下、引用文は原文のままとする。

《梗概》

ここからは『唐鍾馗全傳』の内容を四つ―出身伝(一)、(二)、地獄巡り、悪鬼退治―に分けて論ずることとする。ここで

いう「出身伝」とは、主人公が本来の役目を果たすようになるまでの生い立ちを指す。⁽¹¹⁾

○鍾馗の出身伝(一) (①~⑨)

(①) 唐の大臣をも任じた鍾恵と潭氏の夫婦は子どもに恵まれず、華山で祈願したところ、果たして身孕る。そして紫氣立ち上る中、男児を出産する。祝いの最中、吉兆の白鼠が現われ、二人の僧が男児の未来を予言。(②) 夫婦は男児の名を馗とつける。一歳になる頃、歩き話せるようになり、父の期待も大きくなる。(③) 馗は六歳になり、鄒先生の学館へやることにする。(④) 恵は馗を先生に託す。そのすばらしい資質は明らかになり、学問は日に日に進む。(⑤) 馗は友人たちの遊びにも加わらず、又、皆が喜び騒ぐ端午の節句にも、一人屈原の事を想って涙を流す。四年後、別の先生に就くことになる。(⑥) 水緑橋の余南華先生の書院へ赴き、益々勉学に励む。二年後、先生の友人、徐中陽が来てその才に感嘆する。(⑦) 天の玉帝は馗の人となりを試すため、司簿総管を派遣。総管は美女に変じて執拗に誘惑するが、拒絶される。(⑧) 総管の報告を受けた玉帝は、いずれ馗に妖魔を収めさせることにする。一方、恵は重い病に罹るが、馗の真心込めた一文が天に通じ、天の仙丹で恵の命は救われる。(⑨) 恵の五十歳の誕生日、学士の張憲は馗の才に驚き、娘を娶合わせることにする。馗は書院に戻り学問に精を出す。

○出身伝(二) (⑩~⑬)

(⑩) 玉帝は、人間の善悪を記す筆と妖魔を収める剣を馗に渡す。その晩、妖魔が挨拶に集まり、馗は筆と剣を示して騒ぎを起こさぬよう言い渡す。(⑪) 官を辞した張憲は娘の秀英と馗との結納を済ませ、馗を自分の家で勉強させる。一年後、大比の秋に馗は都へ。海口に泊った夜、玉帝の下されたものを使うように、と夢のお告げがあった。(⑫) 砂糖売りの張一本は商売の帰り途、神上嶺にさしかかる。そこに住む野雉の精は、一本が心を寄せる宿の妻に化けて交わ

る。一本は気が狂い、妻と母は法師に頼るが効き目なし。妻は夢のお告げで、通りかかった魘に助けを求める。一文を書いて剣をかざすと、雷が野雉を打ち殺す。(13) 孫氏の宗祠内の石馬二匹が多くの人を殺し、被害甚大。当地を通りかかった魘は、四人の息子を殺された張讓の家に泊す。事情を知った魘は祠の中に入り、石馬の頭を斬り落とし退治する。(14) 化龍門に仮住いする受験生の余華烈は妓女李月仙に夢中になるが、体は衰退する。月仙は以前、歳寒溪に入水しようとした女だが、実は鰲の精であった。魘がのり出すと、月仙は土穴に隠れる。魘が疏文を書いて祈ると、上帝は土地神・城隍神を問い質し、鰲精を捕えるよう命ず。城隍神は陰兵の応援で鰲精を捕え、魘が斬って退治する。(15) 魘、科試に失敗。不面目で故郷に帰れず、終南山へ。途中、河口で老人の物乞いに遇う。老母を死なせ老父を追い出した不孝な息子夫婦に怒り、疏文を書く、夫婦は雷に打たれて死ぬ。終南山に着くと、その僧房に住む。(16) それを知った両親・張憲夫妻は落胆。秀英は傷心の余り死亡。魘はその知らせに悲しみ、文を作り祭る。夢で、秀英が天界に迎えられたのを知る。「一葉欠落」魘は天旨を受けて冥司へ。恵夫妻は息子の死を知り、衝撃の余り死亡。

○地獄巡り (17) (18) (19) 表(イ)を参照

○死後の悪(鬼)退治 (21) (22)

(21) 天宮に戻った魘は降妖の鉄簡を授けられ、終南山へ身を隠す。長老の潔空の夢に現われた魘は、自分の使命を話す。(22) 終南山の麓、大工・黄祐の妻呉氏は、夫の不在中に山魘(山の精怪)に従わされる。夫はそれを知り法師の力に頼るが、逆に呉氏を攫われる。山中捜すが見つからず、潔空の助言で鍾魘に祈る。その晩、魘は大毛山の山洞の山魘を皆殺し、呉氏を救う。(23) 明皇が病いに罹り、虚耗という小鬼に悩まされる。魘が現われて小鬼を食ってしまう。

翌日、明皇は呉道子に魘の画を描かせて祀り、又天下にも画を配る。(30) 宜山江の辺りで怪を作す蝙蝠の精は、父母に再婚を強いられて自殺した昆玉を見かけ、彼女に化ける。再婚先の朱士貴の家へ行き、賢婦と言われる。二年後、士貴は病いになる。士貴の父は魘の画を買って来るが、その魘が鉄簡で蝙蝠の精を殺す。(31) 榮陽の武亮采の妻胡氏は、夫の友人郝元弼に迫られるがはねつける。夫不在のある晩、元弼は隣家の張婆さんの声を真似て門を開けさせ、婢の春香ともども意に従わなかった胡氏を殺す。夫は包拯に訴え出る。包拯の夢に現われた胡氏は、本堂の鍾馗が証人と語る。魘の降臨を祈った包公は、魘を証人に元弼を断ず。(32) 楊州の李浩は、布の買入れて朱塘を過ぎる。当地の窳業者の丁千・丁万の家に泊まり、金目の物を狙われ殺される。死体は土と一緒に焼かれ烏盆(12)になる。それを買った王老人が小用をたそうとすると、烏盆が事件を訴える。が、包拯の前では語らず。衣裳が無いためと言うので、衣をかぶせると事件を訴え、犯人の家の鍾馗が証人、と言う。魘が証言し、二人は死刑。(33) 李毛保の母を横取りした五通は、徐公の姫の首飾りを狙う。盗み出したところを魘に一撃され、左の股を傷つける。毛保はそれを聞いて鍾馗の像を堂の中に……〔以下欠落〕

三

△梗概▽では、⑩までを出身伝として扱ったが、その内容は大きく二つに分かれる。(一)①～⑨までと(二)⑩～⑬までである。⑩で鍾馗は玉帝から劍と筆を賜わり、生きながらにして妖怪退治を始めるので、前半(一)が、謂わば純粋な出身伝であるかもしれない。

初めに述べたように、歴史上実在しない鍾馗の出身伝であるから、当然、創作か或いは他の材料に基づいたか、である。『唐鍾馗全傳』以前の、鍾馗に関する記載(13)と比べてみると、それらと関連づけられるものは僅かである。誕生時に

於ける吉祥、幼い頃からの勉学と才能、誘惑に対する拒絶、或いは自身の婚約等、他書では見られないものである。僅かに醜い容貌、応試の失敗に他書の痕跡が見られる。

『事物紀原』等では、魘は大きな鬼として現われる。破帽をかぶり、藍袍を着て……といういでたちの描写はあるものの、容貌についての具体的な描写は無い。元朝の薩都刺は彼の詩『終南進士行、和李五峰題馬麟畫鍾馗圖』⁽¹⁴⁾の中で、鍾馗を描いて「終南進士髮指冠、綠袍束帶烏靴寬、赤口淋漓吞鬼肝、銅聲剝剝秋風酸、大鬼跳梁小鬼哭、豬龍饑嚼黃金屋、至今怒氣猶未消、髻戟參差怒雙目——終南の進士・鍾馗の髪は怒りで逆立ち冠を衝き、緑の上着に束帶、黒い靴をゆるやかに履く。口から血を滴らせて鬼の肝を食い、破鐘の如き声はがらと、秋風に響いてすさまじ。大鬼は跳梁し小鬼は哭す、(災の種、安祿山の変じた)猪竜は飢えて黄金の殿屋を食んだ。今に至っても鍾馗の怒りは消え去らず、戟の如き髻はふぞろいに生え、両の目を怒らせて居る」げにも恐ろしげな鬼の様子である。恐ろしいものは恐ろしいもので制す、という考えであろう。しかし、魘が生まれつきの醜貌であるとの説は、今のところ『唐鍾馗全傳』以前には見当たらない。その醜貌ゆえに試験に落ちたという話の展開は、後の『斬鬼傳』『平鬼傳』所謂「鍾馗嫁妹」⁽¹⁵⁾戯曲にも見られる。『唐鍾馗全傳』では⁽¹⁶⁾に有るはずだが、肝心の部分が欠落している。その代わり⁽¹⁷⁾で、終南山の潔空の夢に現われた鍾馗が、「都へ試験に赴いたところ、かたじけなくも首席で合格した。が思いがけず、唐王に小生の醜い容貌を嫌われ、見棄てられ用いられなかった。家に戻る面目がないと思い、遂には御殿の階段に頭をぶつけて死んだ。」と話している。具体的な容貌の描写としては、①で「那孩子而(面)貌奇異、体格非常」⑥で「其面貌奇異、体態非凡、聲如洪鍾、眼似銅鈴」⑨で「双眉似劍、兩眼員(圓)爭、面貌怪異、体格非凡」と記されているだけである。これでは、体が大きくて眼はまんまる、眉は劍のようだ、という事しかわからないが。

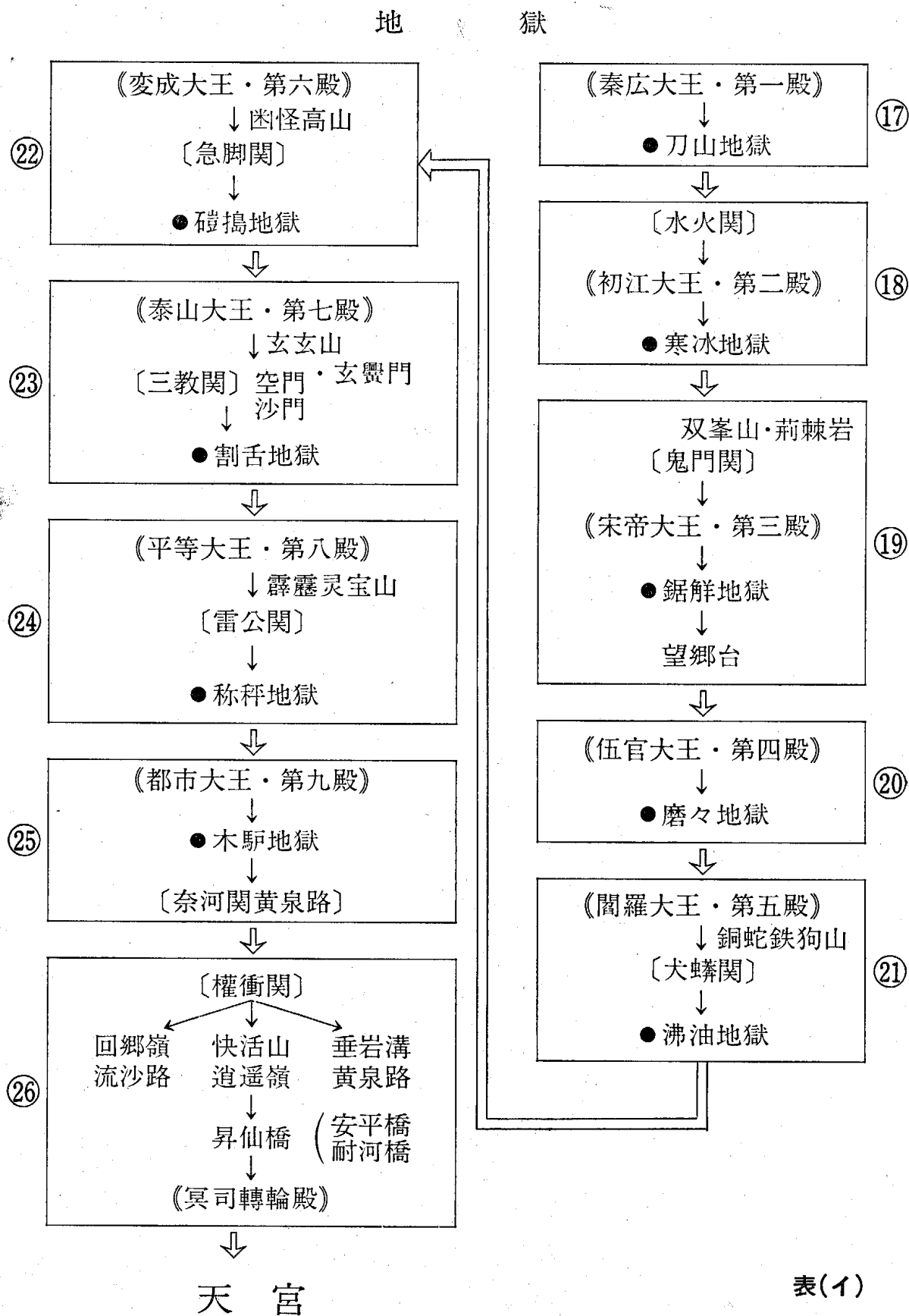
魘が生まれつき醜貌だという話は、玄宗の夢に鬼として出現したことと、落ちるはずのない試験に落ちた理由づけと

して、発生してきたものと思う。

ところで、悪を制する醜い容貌の主人公というと、包拯をすぐ思い浮かべる。この鍾馗の出身伝自体、かなり包拯を意識して書かれていると思われる。というのは、①の中で神人が「汝之宿世、乃上界武曲之星、托身於汝——汝の宿世は、天上界の武曲星を汝の身に托されることである。」と、出産間近の母親に話す個所が有るからである。「武曲下凡」は本来、宋の仁宗誕生説話に⁽¹⁶⁾関連づけて「文曲下凡」と対で記述されることが多い。この文曲は包拯を、又多くの場合、武曲は狄青を指す。『水滸伝』引首では、泣いてむずかる赤子の仁宗の耳元に、翁が次のように囁く。「『文有文曲、武有武曲』端的是玉帝差遣紫微宮中兩座星辰下來輔佐這朝天子。文曲星乃是南衙開封府主龍圖閣大學士包拯。武曲星乃是征西夏國大元帥狄青。——『文には文曲有り、武には武曲有り』まさしく、天の玉帝が紫微宮の二星を、この天子様の輔佐にと下されました。文曲の星とは、南の役所、開封府の主たる龍圖閣大學士包拯様。武曲の星とは征西夏國大將軍の狄青様。」又、成化説唱詞話「上元十五夜看灯伝」に「文曲星官包丞相、武曲星官狄將軍」とあり、同じく包公の関わる他の成化説唱詞話でも、「文の包待制」と「武の狄將軍」が対をなしている。鍾馗は、この対の中に武の鍾馗として割り込んだ形だが、一つには『夢溪筆談 補筆談』にある「臣鍾馗氏、即武擧不捷之士也。」という記述から、もう一つには、その悪(鬼)退治という役割から、「武曲下凡」ということになったのだろう。

邪辟払いで武曲下凡のはずの鍾馗だが、出身伝(一)を見る限りでは、非常にちぐはぐな印象を与える。馗のすぐれた天分、並はずれた精勵を強調する余り、「文」の面が完全に表に出て、かちかちの儒教者像になってしまっている。殊に⑤の樂しかるべき端午の節句に涙を流す場面など、いささか奇異な感じさえ受ける。又、才子佳人を強調する余り、生まれつきの醜貌の鍾馗が②で「此子姿容俊雅」というような記述になったりする。

この出身伝は、鍾馗本来のイメージとは大きく異なってきた。そのためか、後の『斬鬼傳』『平鬼傳』には全く



表(1)

採られていない。『唐鍾馗全傳』にのみある出身伝だが、何か他のものに拠った可能性もある。が、今のところ何に拠ったか思い到っていない。

出身伝(口)については、包公説話との関わりから、後で取り上げることとする。

次に、地獄巡りだが、すぐに連想するのが『西遊記』玄宗の地獄巡りである。が、『唐鍾馗全傳』ほど整った形のものではない。『目蓮変文』も同様である。この地獄巡りは、小説類の中で最も詳しい記述かもしれない。第一殿の秦広大王から第十殿の轉輪大王までの十王は、「十王経」⁽¹⁷⁾から来ていると思うが、地獄の描写には「玉曆鈔伝」或いは宝卷の「七七宝卷」「十殿宝卷」の影響が考えられる。⁽¹⁸⁾今回は、実際に比較検討する事ができなかったので、『唐鍾馗全傳』に於ける地獄の構造を表にして、紹介するにとどめる。

四

鍾馗の出身伝(口)と死後の悪(鬼)退治に含まれる説話に関しては、胡万川氏とW.L. Idema氏が言及しているが、その対象は②〈對證盆冤〉一話だけである。この②話も含めて、今回「百家公案」⁽¹⁹⁾等から検出した関連説話を表にして、次に記す。

②「對證盆冤」この説話は、包拯の取り扱った事件として大変有名で、様々なヴァリエーションで戯曲・小説等に登場する。地名・登場人物名・話の展開等から見ると、『百家公案』(↓『龍圖公案』)・『唐鍾馗全傳』は一つのグループとみなされる。ところが鍾馗の登場という点に限れば、元曲の「盆兒鬼」にのみ鍾馗の名が見える。『元曲選』に収められる「盆兒鬼」第三折では、張徹古が怪をなす盆兒を家へ持ち込んでしまった時に、門神を罵った挙句「手攤了這應夢的鍾馗——この、夢では応える鍾馗の画を手でひきはがしてしまった。」抄本の「盆兒鬼」⁽²⁰⁾では、第四折でも中々役所

〔悪(鬼) 退治説話とその関連説話〕

	元曲	成化説唱詞話	百家公案(龍圖公案)	その他
⑫			十三回「爲衆伸冤刺狐狸」(×)	
⑬		〔仁宗認母傳〕中 〔諸山曾斷孫廟鬼〕		
⑭		〔仁宗認母傳〕中 〔三瓜團魚驚精〕?		
⑯			三十三回「枷城隍拿捉妖精」(×)	
⑰			二十二回「鍾馗證元弼絞罪」(×)	
⑱	玎玎璫璫盆兒鬼	新編説唱包龍圖公案斷歪 烏盆傳	八十四回「瓦盆子叫屈之異」 (烏盆子)	明傳奇「斷烏盆」(曲海 總目提要) 京劇「烏盆計」

⑯話は、鍾馗の古くからの故事で、性格を異にするため省いた。(×)は、「龍圖公案」に採られていない、の意。

表(四)

の中に入れていない盆兒が「你那畫着的門神、貼着的鍾馗狼似——あなたの、画かれた門神・貼られた鍾馗はひどいやつで」と訴え、紙銭を焼いてもらって、やっと包公に事件を話すのである。ここでの鍾馗は、家の中に怪をなす物を入れない門神として登場する。盆兒鬼の邪魔をこそすれ、『唐鍾馗全傳』のような、盆兒鬼に味方する大事な役目は果たしていない。成化説唱詞話の「烏盆伝」は又、元曲とも大きくストーリーを異にする。下端役人の潘成が事件の解決に大きく関与し、幽霊の真似をして犯人の自供を導く、など面白い趣向もある。ここでも、烏盆は二度にわたって包公の前では黙する。一度目は、衣裳を着ていないから、二度目は、やはり土地神と門神に紙銭を焼かなければ入れない、というのである。説唱詞話では鍾馗の名は出て来ないものの、元曲同様、門神が関わって来る。どうも、この「盆兒鬼」の話には、早くから門神(鍾馗)が関わっていたと思われる。

胡氏は、②話の「對證」以外のストーリーは『龍圖公案』に拠ったものである、と言っている。これは、胡氏が『龍圖公案』の前身『百家公案』を直接目にしていないため、と思われる。⁽²¹⁾むしろ、この②話は『百家公案』の文章に鍾馗の登場を付け加えた、と言ってよいのではないだろうか。と言うのは、『百家公案』の文はそのまま『龍圖公案』に引き継がれている上、一覽表を見てもわかるように、『龍圖公案』には採られなかった『百家公案』の話が幾つか『唐鍾馗全傳』の中に見られるからである。それでは『唐鍾馗全傳』の編者は何故、証人としての鍾馗の登場を『百家公案』の文章に付け加えたのか。一つは、この説話に早くから門神の鍾馗が絡んでいたため。もう一つの要素は、次の項でも述べるが『百家公案』二十二回に、鍾馗が証人となる殺人事件が有り、それも③話として採っているところから、③話の形式にならって鍾馗を登場させて鍾馗説話の一つに為したのだ、と思う。もう一つ可能性として、鍾馗が証人の役目をする「盆兒鬼」が、戯曲関係で明代已に有ったかもしれない、ということである。『曲海繪目提要』「断烏盆」には「今劇中云、符召其家鍾馗等。問明此事。則又加増飾。——今の劇では、その家の鍾馗等の降臨を祈り、この事件を解決したとなっている。これは後から付け加えられた筋だろう」とあり、清朝以前に無かった、とは言えないからである。

③「證除元弼」の話は『百家公案』二十二回をほとんどそのまま採り、『百家公案』との密着度が一番高い話である。『百家公案』の中の詩三句も、字句の異同はあるが、そっくり引用されており、頭にある「断云……」の七絶も③話の最後にそのままの形で残る。全体に『百家公案』の方が詳しい記述で、文章も硬い。例えば、武亮采の妻胡常娘に横恋慕した邨元弼は、ある晩、武の不在中に家に押し込むが、以下は次のような文章になっている。「常外大驚忙問、叔夜至何為、弼道、为嫂而來、嫂念小叔青春、肯諸鸞鳳之情、終身感戴、若不相從、利劍在此、常外哭天、屈杀我也、遂呼弼罵曰、大丈夫立志、劳行正道、烈女律身、豈可苟合、縱使殺我、何懼之有——常娘は大層驚き、慌ててたずねた『元弼様、こんな夜中に一体何の用事ですか』弼は『あなたゆえに参りました。どうか私のはやる心に免じて鸞鳳の情をか

なえていただけるなら、終生の感激の極みです。もし受け入れていただけないなら、ここには刃やいばがあります。』韋娘は天に哭して『いわれなく殺されるとは！』そして弼を罵って『大丈夫は志を立ててつとめて正道を行い、烈女は身を律するもの。どうして、そんな淫らな事ができましよう。たとえ殺されようと、何を懼れることがありましよう。』これが『唐鍾馗全傳』になると、「韋娘遂問曰、尊叔執此凶器而來、是何故也、元弼乃曰、来無他故、我要與你相交、從則已、不從則傷你命、韋娘荅曰、寧死於刀下、決不爲此苟且之事。——韋娘はそこでたずねた『元弼様こんな兇器を手にしてやって来るとは一体どういうわけですか。』元弼は『他でもありません。私はあなたと關係を結びたいのです。従ってくださいよいが、従わないなら、あなたの命を損うことになります。』韋娘は答えて『刀の下に死ぬことになって、決してそんな事はしません。』となる。より口語的な表現となっている。又、当然の事ながら、包拯が主人公の『百家公案』では事件の結末・判決等に数十字を費すが、『唐鍾馗全傳』では一挙に縮められて「……証罷、即辞而去、後元弼擬死、未知何如、且听下回分解、——証言し終わると、すぐに辞して去った。後に元弼に死刑の判決が有ったが、その後どうなったか。さて、先ずは次回のお話しを申し上げます。」で終わる。

この③話で証人となる鍾馗は、武家の本堂に画像として掛けられていたが、既に述べた②話では、犯人の家の堂にさえ掛けられていた。これらの事からも『唐鍾馗全傳』が編まれた時には、鍾馗の画が広く一般の家にも掛けられていた事がわかる。

さて、今まで述べてきた②話③話は、『百家公案』との関わりが一目瞭然だが、④話⑤話になると様子がちがってくる。

④「誅戮山魃」この話は②話の続きから、事件の発生場所は終南山の麓となっている。が、『百家公案』では開封府、主人公は銀細工師の王温と妻の阿劉となっている。以下、両話を比較してみると、妖怪の形態に多少の差は有るが④話

「見有一紅鬚赤眼者、身長一丈——見ると、紅いひげに赤眼で、身の丈一丈ほど」後に山魃（山）の精怪、とわかる。「百家公案」「具其人身長七尺、威猛可畏、身青如藍靛、髮赤似朱砂、口闊如盆——見るとその者は身の丈七尺、ただけしく恐しい様子で、身体の青さは藍の如く、髪の毛の赤さは辰砂（朱）の如く、口の大きさは盆の如し」「牛頭鬼臉」後に參沙神（22）であることがわかる。）その現われ方、妻とのやりとりとは、ほとんど一致する。

『百家公案』では、東隣の王者が変事に気付き夫に知らせるといふ付録はあるが、夫が刀を手にして妖怪を待ちかまえるが恐れて隠れていた、という展開も両書同じである。両書が大きく異なるのは後半である。『百家公案』では、王温が苗従善の占いに従って、桃の木で退治しようとするが失敗。苗家一家は妖怪に殺され、その場に來た王温が犯人と疑われ捕えられる。包公は、妖怪の存在と阿劉の攫われた事を知ると、城隍神とその妻に枷し、捜させる。小鬼が陰兵の応援で妖怪を捕え、阿劉も助ける。そして事件は解決する。

『百家公案』での城隍神以下の役割を、（22）話では鍾馗が果たしている。

（23）「雷擊雉精」でも同様の事が言える。一覧表に入れた『百家公案』の十三回は、その前半の一部が（23）話と似ているのだが、事件の解決は、包公が土神（土地神）に命じて狐を捕えて終わる。これが（23）話では当然の事ながら、鍾馗の力によって野雉の精を退治するのである。以下に述べる（24）話では、土地神・城隍神と鍾馗がともに解決に乗り出す。民間信仰に於ける城隍神等と鍾馗の役割、或いは上下関係には中々興味深いものがありそうである。

ところで、一覧表の中で括弧付きになっている（23）「立斬石馬」（24）「收除鰲精」の二話だが、成化説唱詞話「新刊全相説唱足本仁宗認母傳」に記される、包公が断を下した多くの事件の中で言及されている。「諸山會断孫廟鬼」「瓜團魚是鰲精」という記述で、いわば話の題目が伝えられているだけで、具体的な内容はわからない。他の事件の幾つかには考察が加えられているが、右の二文については、まだ関連のあるものが見つかっていないようだ。（24）話は〈梗概〉にも述

べたように、孫氏の宗祠内の石馬が人間に害をなし、それを退治する話である。「孫廟鬼」と言ってよいのではないだろうか。⑭話については、ただ繁精という言葉が共通するだけで、果たして本当に関連があるのかどうか、わからないが、一応表の中に入れておいた。この二話については、具体的に関連のある話が見つかるとは思えない。

以上、一覧表に載せた話について述べてきたが、『唐鍾馗全傳』の構成から考えて、表外の話にも何か他に拠った話があるはずで、しかも包拯が解決した話であった可能性が高いように思う。

ところで、ここまでずっと『百家公案』（『龍圖公案』）↓『唐鍾馗全傳』の図式に従って論を進めてきた。『唐鍾馗全傳』が他の話の寄せ集めの書であるらしいこと、又、胡氏の言うように、⑳話〔對證烏盆〕の鍾馗の登場をわざわざ除いて『百家公案』に収める必要性が無いこと、又、文体の面からも、この図式の逆は考えにくいように思う。が、『百家公案』『唐鍾馗全傳』ともに原刊本ではないため、一つ一つの説話の成り立ちは、もっと複雑な経緯を辿っているかもしれない。その先後関係も直線的なものではない可能性が多い。それぞれの説話の流れを、明以前にも逆上って整理していくことが必要で、それを今後の課題にしたいと思う。

注

- (1) 『斬鬼傳』四卷十回、清康熙の拳人・劉璋の手に成る。多くの抄本・版本がある。『平鬼傳』八卷十六回、東山雲中道人編、『斬鬼傳』に遅れて成立か。大塚秀高編『中国通俗小説書目改訂稿』に版本が詳しい。
- (2) 胡万川著『鍾馗神話與小説之研究』（文史哲出版社）参照。以下、胡万川の説は本書に拠る。
- (3) 巴黎国民図書館蔵、唐写本『切韻』残卷。胡万川の言う、王仁煦の『切韻』ではなく、一般に『切三』と称されるもの。
- (4) 『欽定全唐文』卷二百二十三所収
- (5) 『東京夢華録』卷十（十二月條、除夕條）、『夢梁錄』卷六（十二月條、除夜條）『武林舊事』卷三（歲晚節物條）

- (6) 清中葉頃には、五月に鍾馗の図を掛けるようになったらしい。『清嘉録』五月掛鍾馗條
- (7) (2)の前掲書第二章、第四章に詳しい。
- (8) 『周禮』考工記、下。
- (9) 明代、無名氏「慶豊年五鬼鬧鍾馗」雜劇。清代、張心其「天下楽」傳奇の一折。『京劇劇目初探』「鍾馗嫁妹」を参照。
- (10) W.L. Idema "Chinese vernacular fiction-The formative period" E.J. Brill, Leiden 1974, Glen Dubbridge "The Legend of Miao-shan" Ithaca press. Oxford Univ, 1978 (未見)
- (11) 『百家公案』(19)参照)には冒頭に「包待制出身源流」が有り、成化説唱詞話にも「包待制出身傳」が有って、包拯の生い立ちが一つの説話になっている。『鍾馗全傳』の生い立ちも同様の性格が見られるため、ここでは「出身伝」と名づけた。
- (12) 陶製の盃たらいのようなもの。元曲では「盆兒」『百家公案』では「瓦盆子」として出て来る。
- (13) 『夢溪筆談 補筆談』卷三、「事物紀原」卷八、「天中記」卷四、『三教源流搜神大全』卷三、(9)の明「鬧鍾馗」雜劇等。
- (14) 『雁門集』卷五所収。
- (15) 「鍾馗嫁妹」では、試験に向かう途中、鬼窟に入って醜貌となる。『京劇劇目初探』参照。
- (16) 沢田瑞穂「四帝仁宗有道君—明代説唱詞話の開場慣用句について—」(『中国文学研究』第四期)、堀誠「四帝仁宗出生故事考」(『中国詩文論叢』第一集)を参照。
- (17) 「仏説閻羅王授記四衆逆修正七往生浄土經」
- (18) 沢田瑞穂「宝巻と仏教説話」(『仏教史学』十一—三・四)、同「地獄變」宝蔵館刊
- (19) 『新刊京本通俗演義全像百家公案全傳』十巻百回、万曆初めの成立か。蓬左文庫蔵—与畊堂朱仁斎刊本(万曆二十二年刊)に拠った。
- (20) 『全元雜劇』三編第三冊(世界書局)所収、脈望館抄本。
- (21) 胡万川も『龍図公案』の前身の本は、万曆年間刊本として論を進めている。

- (22) 大塚秀高「包公説話と周新説話」(『東方学』第六十六輯)註(25)で、沙悟浄の前身ではないか、と書いている。
- (23) 「新刊全相説唱足本仁宗認母伝」……日判陽間不平事、夜間点烛断孤魂、三會曾坐開封府、兩廻朝内現忠臣、山里大虫勾來到、古窑曾断烏盆、街頭曾救林昭得、法場斬了魯皇親、明州曾断陳通判、老鴉下状甚分明、諸山曾断孫廟鬼、也曾空里断狂風、断了負心郎七姐、瓜團魚是驚精、正宮曾断曹皇后、一牢断了兩家人、断得崔護為夫婦、曾断孫焦一个人……」
- (24) (22)の前掲論文中で言及。

補記

最近入手した孫楷第著『滄州後集』(一九八五年、中華書局)に収める「包公與包公故事」と題する論文に、「盆兒鬼」故事の演變について述べている部分があり、鍾馗との関わりについても僅かだが述べられている。関係資料として、ここに追加しておく。